

職員動靜

○職員辭令

昭和二年十月一日

教授 六角注多良

宮内省より依囑に係る御大禮御劍裝飾製作主任を命ず

教授 清水 龜藏

宮内省より依囑に係る御大禮御劍裝飾彫金製作主任を命ず

教授 渡邊 啓三

宮内省より依囑に係る御大禮御劍裝飾圖案製作主任を命ず

同年十二月二十日

教授 森井 健介

文部省視學委員を命ず

昭和三年一月九日

文部省視學委員 教授 森井 健介

青森岩手二縣へ出張を命ず

同年同月十日

臨時雇を命ず 但教務掛勤務

同年同月十二日

佐々木總一郎

山崎覺太郎

任東京美術學校助教 講師囑託を解く

同年同月二十日

除服出仕

講師 村田 良策

○正木〔直彦〕校長住邸は牛込區矢來町四番地の處昨年未同町一體地番の改正に因り三十三番地と變更に爲りたり

○坂口〔朧〕助教〔授〕は昨年十一月二十五日夜市外千駄谷町の住宅類燒の災に遭はれ淀橋町柏木九十九に移轉さる 依て職員厚誼會より御見舞金一封を贈呈し鑄造科主任津田〔信夫〕教授之を携行して慰問したり

○松田助教教授〔義之〕は昨年十一月中に巢鴨町字平松一三〇三に移轉さる

○西田〔正秋〕助教教授は同じく十一月中に小石川區小日向臺町三丁目五に移轉さる

○村田〔良策〕講師は昨年末より郷里栃木縣佐野町に歸省中の處今一月六日嚴父誠治氏急病遠逝されしに付職員厚誼會より香奠として金一封を贈り哀弔したり

○清水龜藏氏も新築成り、府下北豐島郡中新井村字中七六六へ移轉せらる

職員動靜〔二六―八。S・三・三・五〕

○正木〔直彦〕校長 二月五日六日の兩日間奈良地方へ出張せらる

○岡田〔三郎助〕教授〔西洋畫科〕二月十八日付にて專賣局より專賣品の意匠に關する事務を囑託されたり

○谷本〔千代雄〕書記 北豐島郡瀧野川町田端三七に移居

○美術學會の創立

豫て本校卒業生等の勳めありし、本校出身者を中心とする、美術に關する學術の研究を目的とする學會の創立は本年に入り數度の創立委員の會合の結果、去る二月二日左記の如き會則の下に、其成立を告げたり。

美術學會規約

第一條 本會ハ美術學會ト稱ス

第二條 本會ハ美術ニ關スル學術ヲ研究シ其ノ發達ニ資スルヲ以テ

目的トス

第三條 本會ハ左ノ事業ヲ爲ス

一、研究會

一、講演會

一、講習會

一、展覽會

一、實地踏査

一、特殊研究ニ對スル補助

一、美術ニ關スル出版

一、會誌ノ發行

第四條 本會ハ東京美術學校教職員卒業生並ニ學生ニシテ美術ニ關スル學術ノ研究ニ從事スル者及ビ其ノ他趣旨ニ賛成スル者ヲ以テ會員トス

第五條 會員ハ左ノ三種トス

一、名譽會員

一、特別會員

一、正會員

第六條 會長ハ東京美術學校長ヲ推載スルモノトス^{〔載〕}

第七條 會員中ニ理事若干名ヲ置キ本會ノ事務ヲ擔當セシム但シ理事ハ會長ノ指命ニ依ルモノトス

第八條 名譽會員特別會員ハ理事會ノ詮衡ニ依リ會長ノ承認ヲ得タル者ヲ以テス

第九條 正會員ノ會費ハ當分ノ中年額金六圓トス

第十條 本會ノ事務所ハ東京美術學校内美術史研究室ニ置ク

美術學會役員

會長 正木 直彦

理事 西田 正秋 小場 恒吉 鎌倉芳太郎 田邊 孝次

今 和次郎 青山 新 齋藤 佳三 森田龜之助

(イロハ順)

美術學會發起人

六角注多良 西田 正秋 千頭 庸哉 小場 恒吉

岡田捷五郎 和田 季雄 香取秀治郎 金澤 庸治

鎌倉芳太郎 田邊 孝次 津田 信夫 辻村延太郎

松田 義之 今 和次郎 青山 新 齋藤 佳三

澤口 悟一 白濱 徵 島田 佳矣 清水 龜藏

森田龜之助 鈴川 信一 (イロハ順)

〔東京美術學校近事〕〔二七一—。S・三・四・一四〕

故大村西崖先生銅像除幕式

三月八日午後二時から本校校庭（彫刻科教室に囲まれた中庭）に

於て故大村西崖先生の銅像除幕式が舉行された。發起人總代として島田〔佳矣〕教授より事業報告あり。故西崖先生令嬢（茉莉子さん九歳）に依つて來衆拍手の中に除幕せらるゝや、温顔生けるが如き支那服着用の胸像現る。續いて正木〔直彦〕學校長の西崖先生の世界的偉業に就て、高村光雲翁が彫刻家の教授として生徒時代からの西崖先生の事及溝口禎次郎氏が同窓生として親しく交はられたる上よりの西崖先生を述べられ、わざ／＼上京された岩淵町長の祝辭あり、親戚總代大村芳樹氏併に親族總代大村嘉彦氏の謝辭あつて、式全く終つた。此の日前日の積雪に加ふるに風梢出たけれど近日になり快晴で來賓は未亡人、令息、令嬢はじめ六七十名あつた。

生きて母校の爲め、廣くは世界の爲めに盡された母校出身の第一人者西崖先生は今や不久の形を我校庭に留められて將來幾多の美術學生をして業に勤ましむるの範となる事であらう。

銅像建設の企は専ら田邊孝次氏の奔走に依り、その資も意外に多く集まつた。之れは一つに田邊氏の幹旋宜しきを得たのであるが、亦故西崖先生の徳の然らしむる事の多い事は言ふまでもない事でありませう。

銅像の原型製作基石の設計等は本校教授朝倉文夫氏の義侠的行爲になりました。

第三十七回卒業證書授與式

三月二十四日午前十時より本校大講堂に於て第三十七回卒業證書授與式を舉行す。第一鈴にて新卒業生入場著席、第二鈴にて職員、舊卒業生著席、第三鈴にて來賓著席、校長の式辭に始まり、各科及

各部總代に卒業證書を授與し、正木校長の告辭、文部大臣（代理近澤道元氏）訓辭あつて卒業生總代（圖案科塚本圀太郎）答辭に式終り、職員及新卒業生は玄關前にて記念撮影をなす。

卒業生科別人員

科名	本科	選科	特別學生	計
日本畫科	一六	〇	〇	一六
西洋畫科	三八	四	〇	四二
彫刻科	塑造部	九	一	一〇
	木彫部	五	一	六
建築科	六	〇	〇	六
圖案科	一	〇	〇	一
金工科	彫金部	三	五	八
	鍛金部	〇	三	三
鑄造科	三	一	〇	四
漆工科	四	一	〇	五
圖畫師範科	一八	〇	〇	一八
合計	一一三	二七	〇	一四〇

卒業生姓名及卒業製作目録（席次イロハ順）

日本畫科

晩秋の榛名	本科	岩上	先天（長野）
雨後二題	同	石川	一代（東京）
庭	同	馬場	和夫（香川）
雙屋	同	奥村	義雄（熊本）

淨境	同	川部東次郎(東京)	女の像	同	勝見謙信(廣島)
麗人文技圖	同	高橋道利(東京)	憩	同	田中致美(熊本)
梳る女	同	立石商一(廣島)	少女	同	田中孝夫(岡山)
妙義圖繪	同	武田正躬(長野)	憂愁	同	藏本寛六(島根)
春郊	同	永田駿(福岡)	マダムシラネ	同	田淵巖(鳥取)
洛西落柿舎	同	名古屋鎌一(廣島)	女	同	竹田讓(福岡)
凧	同	村金平(富山)	裸體	同	中井惣之助(東京)
小雨	同	村上秀夫(東京)	室内	同	野崎龍雄(東京)
寢椅子	同	安松義弘(東京)	裸婦	同	山村孝太郎(東京)
磯海苔摘み	同	齋藤勇吉(山形)	裸女	同	山口猛彦(佐賀)
閑庭	同	三輪敏夫(愛知)	母	同	安田岩次郎(東京)
春	同	森則康(富山)	黒衣の夫人	同	丸山清六(新潟)
			黒衣の少女	同	松原勝(岐阜)
			少女	同	古山潤(宮城)
西洋畫科			像	同	福島順之助(東京)
裸婦	自畫像	岩田芳助(埼玉)	裸體	同	小松原義則(島根)
婦人像	同	石井喬明(群馬)	二人	同	天野武吉郎(廣島)
裸婦	同	伊勢幸平(福岡)	雪夜	同	淺井景一(富山)
工夫人の像	同	波多野勝好(山口)	習作	同	佐藤文雄(秋田)
暖爐の室	同	橋口康雄(鹿児島)	黒衣	同	佐藤功(福島)
靜物	同	二宮不二麿(宮城)	浴女	同	佐川源治(三重)
島兄の像	同	星合良顯(大阪)	船大工	同	(元)迫田鐵次郎(三重)
姉妹	同	大澤昌助(東京)	支度	同	三木辰夫(東京)
古畫の前に	同	奥村義雄(東京)		同	宮間郁三(千葉)
試作	同	加藤鬼頭太(北海道)			
少女讀書	同	片野誠二郎(千葉)			

裸婦	同	島津	久幹(鹿児島)	習作
畫房にて	同	清水	直康(岡山)	習作
赤衣の少女	同	關谷	陽(栃木)	習作
風景	同	杉山	榮(廣島)	習作
窓際	同	鈴木	重成(福島)	習作
裸婦	同	林	清(岡山)	習作
讀書する女	同	同	同	習作
裸婦	同	同	同	習作
裸女	同	同	同	習作
彫刻科	同	同	同	習作
塑造部	同	同	同	習作
靜聆	本科	河村 ^(短)	幸成(石川)	裸女
若き女の顔	同	笠置	季男(兵庫)	聖女
岐路に立ちて	同	樽谷清太郎	(富山)	胸像
M氏の像	同	堆朱	克彦(東京)	別府温泉浴場
煙草屋の看板	同	村井	次郎(京都)	Station
懊惱	同	梁川	剛一(東京)	集合住宅
モガ	同	佐藤	恒三(福島)	The Central subway station and Hotel
トルソ	同	平松	豊彦(東京)	美術學校
裸像	同	長島	勝正(富山)	ホテル
少女靜立	選科	西川	爲善(石川)	圖案科
少女	同	和田	義臣(香川)	更紗壁掛圖案
毛斷	同	栗田	年彦(茨城)	飾棚及飾付工藝品圖案
習作	同	山崎	三雄(石川)	裝飾文様圖案

堀江	同	起(岩手)	堀江	同
本間	同	俊作(北海道)	本間	同
大司	同	精七(福岡)	大司	同
藤野	同	隆秋(群馬)	藤野	同
江川	同	治(岡山)	江川	同
三浦陶次郎	同	(新潟)	三浦陶次郎	同
市島	本科	捷造(東京)	市島	同
中野	同	四郎(山口)	中野	同
村井	同	辰男(富山)	村井	同
安田松之助	同	(東京)	安田松之助	同
菅原	同	安男(山形)	菅原	同
青山	選科	德(徳島)	青山	同
今吉	本科	鐵一(大分)	今吉	同
翁村	同	壽(東京)	翁村	同
川野	同	德惠(茨城)	川野	同
梅野欽次郎	同	(神奈川)	梅野欽次郎	同
榮	同	米治(北海道)	榮	同
平松	同	義彦(東京)	平松	同
飯田	本科	久雄(廣島)	飯田	同
塚本罔太郎	同	(京都)	塚本罔太郎	同
中村	同	茂好(香川)	中村	同

刺繡四曲屏風圖案

同 熊田 早苗 (福島)

電氣ストーブ

本科 黒田 清純 (鹿兒島)

刺繡壁掛圖案

同 安田 三良 (石川)

燭臺

同 丸岡 芳男 (香川)

織物壁張圖案

同 藤井 正胤 (富山)

花瓶

同 丸岡 茂德 (香川)

描更紗壁掛

同 小西 富治 (岡山)

噴水塔

選科 佐藤 武雄 (東京)

衝立圖案摸型

同 小山 茂 (京都)

漆工科

婦人室内裝飾及器具圖案

同 木下 銈五郎 (石川)

小棚 (冬梅)

本科 織田 一郎 (富山)

刺繡壁掛圖案

同 森田 矩國 (富山)

小箱 (本生譚)

同 笠間 興男 (京都)

各種裝幀圖案

同 鈴木 文明 (福島)

硯臺 (鳳凰文)

同 高橋 孝人 (岩手)

書棚及飾付工藝品圖案

選科 任 濤 宰 (朝鮮)

文庫

同 溜貝庸之助 (埼玉)

金工科

飾箱 (天使)

選科 福岡 縫太郎 (東京)

彫金部

圖畫師範科

生菓器

本科 川口 武一郎 (廣島)

昭和三年三月二十四日付左ノ通り奉職ニ決定セリ

迎へられる赫姫

同 海野 建夫 (東京)

就職學校名

飯岡 修 (熊本)

早春の圖

同 相川 久 (東京)

福岡縣立八女中學校

岩井 三夫 (鹿兒島)

幸 (花盛器)

選科 池上 恒 (東京)

沖繩縣那覇高等女學校

花野 三雄 (奈良)

我體つくり給ひし我母に捧ぐ (香爐)

同 磯崎 美夫 (東京)

愛媛縣立三島中學校

戸坂 太郎 (北海道)

葉卷壺

同 田村 泰二 (東京)

北海道旭川高等女學校

兼行 武四郎 (山口)

三聖菓 (菓子器)

同 信田 六平 (東京)

兵庫縣御影師範學校

田中 爲信 (三重)

鍛金部

兵庫縣立龍野高等女學校

田代 諫夫 (熊本)

照明具 (壁面取付)

選科 伊藤 英一 (東京)

千葉縣立佐倉高等女學校

辻 利平 (長崎)

失樂園 (Radia Heater)

同 津田 彗二 (富山)

大阪府立市岡中學校

武藤 秀雄 (靜岡)

憧憬を持つ乙女 (飾壺)

同 中山 光次 (東京)

岐阜縣新發田高等女學校

松田 天次 (岩手)

鑄造科

四月入營

松島 正晴 (和歌山)

兵庫縣立加古川中學校
 靜岡縣立掛川高等女學校
 北海道旭川師範學校
 朝鮮
 德島縣立海部中學校
 愛媛縣越智中學校
 神奈川縣奈珂中學校

後藤 幸造(岐阜)
 荒川 濂(千葉)
 秋山 忠勝(新潟)
 金周 經(朝鮮)
 三宅 良次(岡山)
 森 桂一(岐阜)
 佐藤 千里(神奈川)
 以上

本年度特待生

日本畫科 二年 藤森松兵衛
 同 三年 三浦 文治
 同 東山 新吉
 同 網野 亮俊
 同 淺野 正俊
 西洋畫科 二年 白川 一郎
 同 三年 守田 滋
 同 五年 刑部 人
 彫刻科 二年 堀江 泰夫
 同 三年 服部不二之
 同 四年 中島 浩
 同 五年 八谷 均
 同 齋藤 誠一
 木彫部 二年 川崎 榮一
 同 四年 漆工科

建築科

四年 山本 勝巳
 五年 中川 良一
 同 村田 政眞
 同 押野 芳文
 同 關 力
 同 吉谷 岩松
 同 渡邊 欣一
 同 三年 內藤 四郎
 同 四年 山脇 洋二
 同 五年 會田 留吉
 同 二年 秤 雄吉
 同 四年 詫摩日出男
 同 五年 八井 孝二
 同 二年 熊谷 茂

同 四年 川村 源 同 五年 山口庄次郎

本年度入學志望者及合格者表

科名	志願者數	受験者數	合格者數
日本畫科	一〇〇	九二	二〇
西洋畫科	三四五	三二三	四二
同特別學生	一七	一七	六
彫 塑造部	三一	三一	一五
同選科	三六	三〇	一三
木彫部	二〇	一九	七
同選科	八	八	五
建築科	九〇	八四	八
圖案科	一〇一	九四	一五
彫金部	六	五	五
同選科	三	三	二
鑄造科	六	四	四
鑄造科	九	八	六
漆工科	五	四	四
師範科	三三九	三一八	二二
計	一一一六	一〇四〇	一七五

昭和三年 東京美術學校各科實技入學試驗問題(省略)

新入學生姓名

日本畫科(二十名)

飯田 正雄	五十嵐揆一	磯崎 次雄
池田 尙志	井芹 純夫	岡崎 準
和田 恒	河合 光	川本 末雄
吉原 正道	中村 修	並木 安國
武藤 六郎	丸井 金藏	藤村 正直
明石 守孝	鹽 長廣	茂木要次郎
須田 善二	杉山 寧	

王文溥	郭 柏川	洪得順
崔 鳳 彬	襲 ^(眞) 謨	金斗濟

彫刻科塑造部(十五名)

岩崎 良平	濱口 陽三	星野 宣
德力牧之助	小田 寬一	小倉善之助
川口 信彦	谷口富士郎	向井久治郎
漆原馬須雄	山本 廣二	安部 幹雄
明田川 孝	木下 繁	東 國雄

西洋畫科(四十二名)

稻垣 直治	池端 彬	石塚 三郎
伊森 秀樹	林 信	橋尾 常次
鳥羽 宗雄	富岡 馨	岡 正一
小川 卓爾	河合 國雄	川口 忠夫
龜井 嘉治	兼城 賢章	角 浩
春日 清彦	田沼起八郎	曾我 英吉
中村新次郎	檜原 健三	上田 久之
八幡 正夫	山本 太市	町田 成朗
古木 守	藤野不二男	小林 哲夫
小林 剛	寺田精太郎	赤塚 時雄
明石 繁三	淺野 一郎	嵯峨山善信
芦澤 浩	三輪 省三	宮川 泰孝
新宮 清彦	廣田 剛郎	平賀 次男
平山 直隆	關 三郎	鈴木 祖祐

彫刻科木彫部(十三名)

伊藤 鉦次	原 直樹	西田 信
戶張 幸男	富田 松治	成瀬 藤治
宇佐見床一 ^(庄)	牧内 駿司	青柳 利男
新井喜惣治	木村助治郎	明珍 勝友
森川 勝高		

彫刻科木彫部(七名)

糸永 昌泰	今井 一雄	加賀山敬二
淀井 敏夫	中島 博	近野 信次
水野 忠男		

彫刻選科木彫部(五名)

今井榮太郎	中川 道夫	矢野 秀德
小島 留吉	水島 禎	

建築科(八名)

石川 恒雄	保浦 靜二	戶川喜久二
高木 乙彦	長原 玄	松原 方

西洋畫科特別學生(六名)

平山 直隆

關 三郎

鈴木 祖祐

石川 恒雄

保浦 靜二

戶川喜久二

圖案科(十五名)

小林 謙一
小林 進

馬場見良一
室井 正孝

訓覇 行雄
山本 武夫

才田 健治
佐野常一郎

白井 慶治
島 公靖

廣瀬 一郎
砂川 勤三

金工科彫金部(五名)

傍島 實
後藤 年彦

東原 卓馬
本島 高明

金工選科彫金部二年(二名)

大谷 四郎
鈴木 猛雄

金工科鍛金部(四名)

上野義三郎
坂梨 啓示

柴田 武次
三井安蘇夫

鑄造科(六名)

武田 武文
中垣 秀吉

山邊世利人
眞鍋 知道

漆工科(四名)

北村 久造
宮井 漣平

新村 撰吉
宮崎 九藏

圖畫師範科(二三名)

石川 一郎
石野 安親

西村 義人
豊田 一男

大泉 米吉
大嶽 利藏
岡部文之助

岡田 清一
瓦井 好光
金成 勇夫

高倉 昇
高柳 種行
瀧井 金茂

内倉 信次
黒田 良雄
鈴木 傳

松尾 弘
益田 良雄
澤 健二

柴田 善登
平田 興二

○職員辭令

昭和三年二月二十五日

教授 六角注多良

學術研究ノ爲富山縣へ出張ヲ命ス 但往復共四日間ノ事

助教 松田 權六

宮内省ヨリ依囑ニ係ル御大禮御劍髻製作助手ヲ命ス

同 年三月二日

教授 島田 佳矣

學術研究ノ爲京都府へ出張ヲ命ス 但往復共三日間ノ事

文部省在外研究員

助教 水谷 武彦

亞米利加合衆國ヲ在留國ニ追加ス

同 年同月七日

助教 高橋 吉雄

學術研究ノ爲群馬縣へ出張ヲ命ス 但往復共二日間ノ事

同 年同月八日

文部省在外研究員

滿期後昭和四年十二月十五日迄延期ノ件許可ス

助教授 水谷 武彦

除服出仕

同 年同月三十日

講師 齋藤 幸晴

○藤島〔武二〕教授 今鹿鹿兒島縣ヨリ東京府ニ轉籍セラル 且住

所本郷區曙町十五ヲ地番ノ改正ニ因リ十二番ト變更サレタリ

助教授 松田 義之

講師 鈴木 信一

○森〔芳太郎〕教授 去ル大正十五年ヨリ在外研究員トシテ獨逸ニ

留學中ノ處ニケケ年ノ期滿チ歸途米國ニ暫時立寄り三月十四日無事

講師 岡田 起作

歸朝サレタリ 四月ノ新學年ヨリ工藝化學ヲ專任擔當サルベシ

歸朝後直ニ市外巢鴨町上駒込四一五ニ轉住

同 年同月三十一日

教員檢定委員會臨時委員被仰付 第二部部員ヲ命ス

講師 鎌田彌壽治

○森井〔健介〕教授 文部省視學委員ノ任務ヲ以テ岩手青森兩縣下

ノ實業學校視察ノ爲メ三月廿二日出張同廿八日歸京セリ

同 長口 宮吉

同 藤井 昭

○松田〔権六〕助教授〔漆工科〕 二月中下谷區谷中坂町八七へ轉

居

依願解囑

書記 古田 坂松

○北浦〔大介〕書記 東京美術館囑託トシテ同館用務ニテ三月廿日

ヨリ同廿三日迄岡山縣倉敷町へ出張ス

同 昭和二年度物品出納檢査官吏ヲ命ス

同 年四月五日

○修學旅行指導教官及附添職員

松岡映丘氏（京都だけ） 森田龜之助氏。和田季雄氏。森田武氏。羽

助教授 山崎覺太郎

同 宮内省ヨリ依囑ニ係ル御大禮御劍髻飾製作助手ヲ命ス

下修三氏。齋藤幸晴氏。筒崎謙齋氏と確定。

同 年同月十日

教授 松岡 輝夫

〔東京美術学校近事〕〔二七一一。S・三・六・五〕

學術實地指導ノ爲奈良縣京都府へ出張ヲ命ス 但往復共八日間ノ

職員動靜

助教授 森田龜之助

○職員辭令

同 和田 季雄

昭和三年三月二十六日

學術實地指導ノ爲奈良縣京都府へ出張ヲ命ス 但往復共十七日間

ノ事

助教 森田 武

講師 羽下 修三

講師 齋藤 幸晴

書記 筒崎 謙齋

本校生徒修學旅行ニ付奈良縣京都府へ出張ヲ命ス 但往復共十七日間ノ事

同 年同月十日

教授 島田 佳矣

同 六角注多良

助教 海野 清

同 松田 權六

東京商工會議所主催大禮記念國產振興會東京博覽會審査官ヲ囑託ス

同 年同月十一日

教授 森 芳太郎

從來擔任ヲ免シ更ニ工藝化學及化學實驗授業擔任ヲ命ス

助教 森田龜之助

西洋繪畫史及英語授業擔任ヲ命ス

同 年同月十二日

教授 白濱 徹

紋正四位(四月九日付) 特旨ヲ以テ位一級追陞セラル

同 年同月十四日

書記 筒崎 謙齋

生徒修學旅行ニ付出張ノ序ヲ以テ京都府奈良縣大阪府兵庫縣ニ於ケル文部省直轄諸學校ノ事務狀況ニ關スル取調ヲ命ス 但出張日數三日間ヲ追加ス

雇 白濱 洵

除服出仕

同 年同月十六日

京都府技師 阪谷良之進

本校生徒京都府修學旅行ニ付臨時實地指導ヲ囑託ス

奈良縣技師 岸 熊吉

正七位 新納忠之介

本校生徒奈良縣修學旅行ニ付臨時實地指導ヲ囑託ス

同 年同月二十日

柔道指南囑託 井上縫太郎

依願解囑

正八位 大江 雄五

本校體操副科柔道指南ヲ囑託ス

同 年同月廿一日

內藤 春治

福岡縫太郎

東京美術學校助手ヲ命ス 工藝化學教室勤務ヲ命ス

教授 六角注多良

學術研究ノ爲秋田縣へ出張ヲ命ス 但往復五日間ノ事

教授 岡田三郎助

敘勳三等授瑞寶章

同 年同月二十四日

助教 松田 義之

學術實地指導ノ爲京都府大阪府奈良縣三重縣へ出張ヲ命ス 但往復共十一日間ノ事

同 年同月二十六日

助教 高橋 吉雄

學術研究ノ爲福島縣へ出張ヲ命ス 但往復共二日間ノ事

同 年同月三十日

講師 今 和次郎

除服出仕

同 年五月一日

助教 田邊 孝次

學術研究ノ爲大阪府石川縣富山縣へ出張ヲ命ス 但往復共一週間ノ事

ノ事

日下喜一郎

朝鮮總督府博物館所藏支那西域發掘壁畫ノ模寫ヲ囑託ス

同 年同月七日

教授 島田 佳矣

學術研究ノ爲石川縣へ出張ヲ命ス 但往復共五日間ノ事

同 年同月十一日

教授 平田 榮二

助教 松田 義之

同 高橋 吉雄

學術實地指導ノ爲神奈川縣下へ出張ヲ命ス 但往復共一日間ノ事

○正木〔直彦〕學校長はフランス美術を日本に紹介する上に功勞がある云ふので佛蘭西政府からレジオン・ドノール勳章の授與がある由。

○關野〔貞〕講師 本年滿六十歳トナラレ東京帝國大學教授ノ本官ヲ例ノ停年制ニ從ヒ辭任サレ三月三十一日ヲ以テ依願免本官トナリ同時ニ内務技師文部技師ノ兩兼官モ解任サレタリ

○正木〔直彦〕校長 四月六日ヨリ同月十二日ニ至ル間大阪府奈良縣へ出張セラル 又五月十一日ヨリ十四日迄石川縣へ出張セリ

○井上〔縫太郎〕囑託 柔道指南ノ井上囑託ハ明治三十五年以來實ニ二十五年ノ久シキ間本校生徒柔道ノ指南ニ盡瘁サレシガ今回自ラ後任者大江雄五氏ヲ推舉シテ勇退サレタリ 積年ノ勤勞眞ニ深謝ニ堪エズ

○齋藤講師〔幸晴氏〕 郷里秋田縣下ニ於テ實姉死去(三月廿三日)ニ付忌引サレタリ

○今〔和次郎〕講師 四月廿三日母堂死去セラレ忌引サレタリ

○矢代〔幸雄〕教授 昨年四月出發歐洲各國へ出張中ノ處シベリヤ鐵道經由ニテ五月十一日無事歸朝サル

水谷武彦氏は hl Dewet GROSS = KÜHNAUERWEG 29

Dessau. へ轉居タル

石田英一氏は Mr Chales Mathiot 63 Rue du Trasy

Clamapt (Seine)

白濱〔徵〕教授の逝去

白濱徵先生が去る四月九日永逝されました。永々の御病氣の後で



白 浜 徹

と云ふ可きでしようか。突然のやうな氣も致します。大正十三年の夏頃から先生の健康は幾分變化を來して居まして同十五年の秋に腹部切開の大手術を受けられ振腸を直されました。此の手術後回復を氣付かつて居たのですが奇蹟的のやうな現象で再び教壇に先生の温顔を見る事が出来て一同は非常によろこんで居りました。その後以前程な元氣は見られませんが授業は勿論、中學の圖畫科教授時數削減案が出た時など文部當局に向つてその否に就て強い主張をされた元氣などは中々確かなものだつたと聞いて居ります。それから本年二月三日嚴寒の日師範科及教員志望者の爲めに三時間に亘る講義をされたのを最後として再び病床の人となられ遂に四月九日に永逝されたのです。御年六十有三。

我國圖畫師範教育の第一人者として又本校出身の大人物として惜しんでも惜んでも尙足りない方です。次に先生の略歴を掲げて追悼の微意を表します(以下『図画と手工』五月号より転載の略歴は省略。

—編者註—

鑄造科に於ける獎學金

鑄造科では昨年度より陸奥伯爵銅像記念獎學金といふ名目の下に向百ヶ年間外務省構内の陸奥伯爵銅像の保存基金の中より獎學金を受くる事となり本年三月二十五日左の二氏に夫々獎學金が授與された。

鑄造科四年 八井 孝二
同 三年 詫摩日出男

〔東京美術学校近事〕〔二七—三。S・三・七・一〕

職員動靜

○職員辭令

昭和三年五月二十三日

依願免本官

助教 篠田十一郎

同年同月二十八日

常岡 文龜

任東京美術學校助教 日本畫科日本畫實習擔任ヲ命ス

東京美術學校服務 神保豐治郎
陸軍歩兵中佐

本校生徒野營演習ニ付千葉縣下志津へ出張ヲ囑託ス 但往復共七日

日間ノ事

講 師 齋藤 幸晴

本校生徒野營演習ニ付千葉縣下志津へ出張ヲ命ス 但往復共七日

間ノ事

講 師 鈴川 信一

本校生徒野營演習ニ付千葉縣下志津へ出張ヲ命ス 但出張日數三日間ノ事
同年六月六日

任東京美術學校教授 紋高等官七等
同年六月八日

圖畫師範科主任ヲ命ス
同年同月十一日

東京美術學校雇ヲ命ス 教務掛ヲ命ス
臨時雇 佐々木總一郎

○關野〔貞〕講師 四月十六日特旨從三位ニ陞紋セラレ六月八日帝國大學令第十三條ニ依リ勅旨ヲ以テ東京帝國大學名譽教授ノ名稱ヲ授ケラレタリ

○田中講師〔豐藏氏〕 六月十二日京城帝國大學教授ニ任シ高等官四等ニ紋セラレ

○金澤〔庸治〕講師 去ル三月末日付ヲ以テ陸軍輜重兵少尉ニ任セラレ四月十六日正八位ニ紋セラレ

○青山〔新〕講師 五月中市外澁谷町伊達七十八へ轉居ス

○齋藤講師〔佳三氏〕 東京府下石神井一〇九へ最近轉居サル

○前號で一寸校長の分だけを御報告して置きましたが、佛蘭西美術を我國に紹介した功勞者として、正木〔直彦〕學校長、和田英作教

授、津田信夫教授、田邊孝次助教授（畑正吉卒業生高等工藝教授）に佛國政府から紋勳の沙汰の通知が佛國大使館からあつた由。

岩淵に於ける故大村〔西崖〕教授銅像除幕式

本年三月八日校庭に建築せられし、故大村西崖教授銅像と同様のものを、同教授の出身地たる静岡縣富士川町に建設せんとする事は、好而方々計畫中なりしが、朝倉文夫教授の原型複製も出來し、臺坐も出來したるを以て、去る六月十日を以て富士川町尋常高等小學校と、町役場との間の公園内建設地に於て除幕式を舉行されたるが、本校よりは田邊〔孝次〕助教授之に參列して左の如き正木〔直彦〕本校長の祝辭を代讀したるが、近町村よりの人出多く、岩淵稀有の盛儀なりしと。

除幕式祝辭

大村西崖君歿セラレテ茲ニ一周年 其風貌ヲ永遠ニ留ムベキ銅像ハ早ク東京美術學校内ニ建設セラレ今又君ノ郷里岩淵ニ於テモ同シク銅像ヲ建設シ是日除幕式ノ盛儀ヲ舉ゲラル、ハ寔ニ喜ニ堪エザル所ナリ 抑モ君ガ僑英ト敏邁ノ才トヲ以テ夙ニ美術學界ニ高歩シ一世ノ權威者タリシコトハ前年君ヲ弔フノ辭ニ於テ予既ニ之ヲ述ベタリ 今復必ズシモ説カザルベシ 唯君ヲシテ能ク不朽ナラシムルモノハ君ガ生前等身ノ著書是ナリ 恐ラク銅像ノ如キハ君ニ在リテハ深く介意スル所ニ非ラザルベシ 然レドモ此ノ銅像建設ニ依リテ君ノ郷里人ト其後進ノ徒ハ長ク君ノ風貌ヲ瞻望スルヲ得景慕ノ情益々厚ヲ加ヘ以テ觀感興起ノ化アルヲ疑ハズ 銅像ノ建設亦以テ已ムベカラザル也 嗚呼芙蓉ノ靈巖ハ願望咫尺ノ處ニ巍峙ス 君ノ銅像ハ

則チ樹立シテ其ノ嶽麓ノ地ニ在リ 自カラ呼應照映ノ偉觀ヲ占ム
是亦羨ムベキノ至ナリ 聊カ一言ヲ述ベ以テ除幕式ノ祝辭ト爲ス

昭和三年五月十三日 東京美術學校長

〔東京美術學校近事〕〔二七—四。S・三・一〇・一〕

職員動靜

○職員辭令

昭和三年六月十九日

教授 島田 佳矣

學術研究ノ爲長崎縣佐賀縣へ出張ヲ命ス 但往復共十日間ノ事

同年同月廿一日

帝室博物館鑑査官

講師 高橋 健自

陸絛高等官四等

同年同月三十日

教授^{〔務〕} 岡 四郎

教務囑託ヲ解ク 本校講師ヲ囑託ス 但西洋畫科西洋畫實習擔任

ノ事

同年七月二日

助教授 松田 義之

圖書師範科理事ヲ命ス

教授 六角注多良

陸絛高等官四等

(各通)

教授 建昌彌一郎

教授 森 芳太郎

教授 渡邊 啓三

教授 朝倉 文夫

教授 北村 西望

教授 石田 英一

教授 伯爵 平田 榮二

陸絛高等官五等

(各通)

陸絛高等官六等

同年同月七日

除服出仕

同年同月十日

助教授 千頭 庸哉

書記 古田 坂松

福井縣へ出張ヲ命ス 但往復共七日間ノ事

同年同月十六日

絛正五位

絛正六位

教授 沼田勇次郎

教授 六角注多良

教授 建昌彌一郎

教授 森 芳太郎

教授 渡邊 啓三

(各通)

絛從六位

絛正七位

絛從七位

教授 石田 英一

教授 田邊 至

同年同月十七日

學術研究ノ爲千葉縣へ出張ヲ命ス 但往復共三日間ノ事
助教授 和田 季雄

同 年同月廿三日

依囑製作事業ニ關シ石川縣及富山縣へ出張ヲ命ス 但往復共一週
間ノ事
助教授 松田 權六
助教授 山崎覺太郎

同 年同月廿四日

學術研究ノ爲石川縣へ出張ヲ命ス 但往復共五日間ノ事
教授 六角注多良
教授 津田 信夫
助教授 松田 義之

同 年八月六日

(各通)

學術研究ノ爲愛知縣へ出張ヲ命ス 但往復共五日間ノ事
教授 岡田三郎助
教授 島田 佳矣
教授 松岡 輝夫

同 年八月十四日

朝鮮博覽會ポスター圖案審査員ヲ囑託ス
助教授 松田 權六
助教授 山崎覺太郎
依囑製作事業ニ關シ石川縣及富山縣へ出張ヲ命ス 但往復共四週
間トシ三回ニ分チ出張ノ事

同 年同月十八日

滿州へ出張ヲ命ス
教授 岡田三郎助

同 年同月廿九日

敍勳三等授瑞寶章
敍勳三等授瑞寶章
敍勳七等授瑞寶章
教授 和田 英作
教授 島田 佳矣
東京美術學校服務
陸軍歩兵中佐 神保豐治郎
書記 筒崎 謙齋

同 年九月一日

(各通)

教授 六角注多良
教授 小林 萬吾
教授 松岡 輝夫
教授 津田 信夫
教授 清水 龜藏
教授 石田 英一

帝國美術院展覽會審査員被仰付
同 年同月十二日

尾川藤十郎

本校講師ヲ囑ス 但圖書師範科ニ課スル教育學及修身授業擔任ノ
事

同 年同月十三日

任東京美術學校助教授 圖書師範科自在畫授業擔任ヲ命ス
任東京美術學校助教授 圖書師範科手工及自在畫授業擔任ヲ命ス
熊本縣第二師範學校教諭兼訓導 三浦 直政
陸軍歩兵中尉の關係により本年五月一日付
○和田(季雄)助教授

松垣 靄雄

從七位に陞叙されたり

○千頭〔庸哉〕助教 七月三日嚴父清巢翁死去され一定の忌引をされたり

○結城〔貞松〕教授 外務省對支文化事業部の囑託によりて五月廿六日出發支那北京に向ひ出張されたり。折柄支那は南方軍の北伐進出中にて南北兩軍の戰爭酣に我國よりも多數出兵の際なれば教授の旅行は私に憂慮したるも無事使命を果たし七月廿四日歸京さる

○小林〔万吾〕教授 七月十一日出發南滿旅順地方へ旅行され其の月末歸京さる

○古田〔坂松〕書記 會計事務協議會出席の爲め福井縣へ出張を命ぜられ七月十二日出發同月十九日歸京す。

○今〔和次郎〕講師 七月廿五日頃より八月下旬まで東北、北海道、北陸及九州地方の各地に涉り研究旅行をされたり

○島田〔佳矣〕教授 八月一日より同月十四日まで富山縣高岡市、石川縣金澤市の各市主催圖案講習會へ講師として應囑臨講せられ指導の勞に勉められたり

○渡邊〔啓三〕、清水〔龜藏〕兩教授及和田〔季雄〕助教 三氏連袂八月廿八日出發して朝鮮に旅行され京城、平壤、慶州の各地を歴覽し九月十一日歸京す

○岡田教授〔三郎助氏〕 南滿鐵道會社の招聘依頼により渡滿して鐵道沿線に於ける美術工藝上の視察をせらるゝ爲め文部省より滿州出張の命を受け九月八日出發したり 往復一ヶ月間の豫定なり

○石田〔英一〕教授 目下在外研究中なるが去る六月中留守宅を在

原郡駒澤新町一四三へ移轉す

○鈴木〔清〕講師 八月中在原郡在原町戸越二二五へ轉居

○關野〔貞〕講師 九月初め北豐島郡瀧野川町西ヶ原一〇八へ轉居

○圖書科講習會の開設 本年度文部省主催を以て中等學校教員の圖書科講習を當校内に開設せらるゝこととなり其期間は十月廿三日より十一月二日に至る十日間なり 其講義題目講師氏名等左記の如し

用器畫教授法〔十時間〕

工藝史概論〔同〕

工藝の手法と鑑賞〔同〕

漆工藝の應用〔同〕

西洋畫實習〔廿四時間〕

(一) 木炭畫 (二) 水彩畫 (三) 油繪

以上諸講師の外西洋畫科岡〔四郎〕講師、圖書師範科松田〔義之〕助教は各講習助手を囑託され増井〔兼吉〕書記は講習事務取扱を囑託されたり。

〔東京美術學校近事〕〔二七—五。S・三・十一・一〇〕

職員動靜

○職員辭令

昭和三年九月十三日

教授 矢代 幸雄

帝國美術院事務ヲ囑託ス

同年同月廿九日

神戸高等工業學校教授
兼本校教授

古宇田 實

敍勳三等授瑞寶章^{〔宝〕}

除服仕出^{〔出仕〕}

助教授 西田 正秋

同年十月一日(官報)

京城帝國大學教授

講師 田中 豐藏

敍正六位(昭和三年七月十六日)

同年同月三日

教授 小林 萬吾

學術研究ノ爲臺灣へ出張ヲ命ス

但往復共二週間ノ事

同年同月十一日

教授 森井 健介

學術研究ノ爲山梨縣へ出張ヲ命ス

但往復共二日間ノ事

同年同月十三日

校長 正木 直彦

對支文化事業調査會委員被仰付

教授 朝倉 文夫

依願帝國美術院會員被免

同年同月十九日

校長 正木 直彦

佛蘭西國政府ヨリ贈與シタル「オフキシェー、ド、ロルドル、ナ
シヨナル、ド、ラ、レジヨン、ドノール」勳章ヲ受領シ及ヒ佩用

スルヲ允許セラル

教授 和田 英作

佛蘭西國政府ヨリ贈與シタル「コンマンドール、エトアル、ノアル」勳章ヲ受領シ及ヒ佩用スルヲ允許セラル

助教授 田邊 孝次

佛蘭西國政府ヨリ贈與シタル「オフキシェー、ド、ランストリエ
クシヨン、ピユブリツク」記章ヲ受領シ及ヒ佩用スルヲ允許セラ
ル

同年同月廿二日

教授 六角注多良

依囑製作事業ニ關シ石川縣、富山縣へ出張ヲ命ス

間ノ事

事務囑託 足立芳五郎

依囑製作事業ニ關シ石川縣、富山縣へ出張ヲ命ス

間ノ事

但往復共一週

○九月中ヨリ滿洲ニ出張中ナリシ岡田教授(三郎助氏)ハ滿鐵沿線
各地ニ於ケル美術工藝上ノ視察ヲ了シ十月十六日無事歸京サレタ
リ

○小林〔万吾〕教授ハ臺灣總督府主催ノ美術展覽會審査ヲ囑託サレ
十月初旬ヨリ同地へ出張ノ處廿一日歸京サル

○正木〔直彦〕校長ハ名古屋市大禮記念博覽會美術部審査長ヲ委託
サレ十月二十三日二十四日同地へ出張サレタリ

○本年正倉院御物曝涼拜觀ノ爲メ本校ヨリ島田〔佳矣〕教授、矢代
〔幸雄〕教授、和田〔季雄〕助教授、小場〔恒吉〕講師、青山

〔新〕講師等本月二十日以後ニ夫々奈良市へ赴キタリ

〔東京美術学校近事〕〔二七—六。S・三・十二・五〕

職員動靜

○職員辭令

昭和三年十月廿九日

(各 通)

助教授 小泉 勝爾

助教授 常岡 文龜

學術實地指導ノ爲神奈川縣へ出張ヲ命ス 但往復共一日間ノ事

助教授 三浦 直政

學術實地指導ノ爲群馬縣へ出張ヲ命ス 但往復共一日間ノ事

昭和三年十一月九日

助教授 山崎覺太郎

學術研究ノ爲岩手縣福島縣へ出張ヲ命ス 但往復共四日間ノ事

同 年同月十二日

助 手 福岡縫太郎

學術研究ノ爲岩手縣福島縣へ出張ヲ命ス 但往復共四日間ノ事

○正木〔直彦〕校長ハ今回ノ即位大禮ニ付文部々内勅任官同待遇總

代ノ一人ニ選定サレ十一月七日夜出發シテ京都ニ赴キ賢所大前ノ

儀〔十日〕紫宸殿ノ儀〔十日〕賢所御神樂ノ儀〔十一日〕大饗夜

宴ノ儀〔十七日〕ノ四大御儀ニ參列スルノ光榮ヲ荷ハレ無事御役

儀ヲ果シテ十九日夜京都發二十日朝歸京サレタリ

○岡田教授〔三郎助氏〕ハ帝國美術院會員ノ代表トシテ大禮御儀式

ニ參列サル、コト、ナリ十一月八日出發京都ニ赴キ十九日歸京サ
レタリ

○平田〔榮二〕教授ハ伯爵總代トシテ大禮御儀式ニ參列サル、コ
ト、ナリ本月六日出發サレ二十日過ギ歸京ノ筈

○常岡〔文龜〕助教授ハ今回上野櫻木町七現龍院内ニ轉居サル

御即位當日本校に於ける式

十一月十日午後本校に於ても教職員生徒一同大講堂に參集す。

第一鈴にて生徒着席、第二鈴にて教職員着席 時將に正二時、正

木〔直彦〕學校長ハ御大禮參列の爲め京都へ出張中に付、久米桂一

郎教授代つて開會の辭を述べられ、次て御親影奉拜、教職員生徒一

同にて君が代合唱、校長代理の教育勅語奉讀續いて訓話、

正三時に校長代理の發聲につゞいて天皇陛下の萬歳を三唱して式

を終る。

教練の査閲

本年度教練査閲は十一月二十三日施行 先教練教官より狀況報告

あり帝室博物館内の廣場に於て、歩兵第二旅團長陸軍少將古莊幹郎

閣下の査閲を受ける 學校側からは正木〔直彦〕學校長、鈴川〔信

一〕教務主任、和田〔季雄〕助教授立會、神保〔豊治郎〕教練教

官、齋藤〔幸晴〕講師の指導にて、一年の各個分隊教練に初まり二

三年の分隊小隊教練、四年の中隊教練及圖書師範科の各個分隊教練

に於ける助手の動作等に終り、古莊査閲官より一場の訓話あり、午

後會議室に於て査閲官より教練教官に對しての講評あり。

成績は概ね良好、逐年一般的に進境を示しつゝありと、

還幸奉迎

十一月二十七日 還幸に付本校に於ては總代として職員六名生徒二十九名二重橋前文部省指示位置に堵列奉迎す。

〔東京美術学校近事〕〔二七―七。S・四・一・二五〕

職員動靜

○職員辭令

昭和三年十一月二十六日

教授 森井 健介

第四回實業學校卒業程度檢定委員ヲ囑託ス

同 年十二月四日

除服出仕

教授 水谷 鐵也

同 年同月十四日

雇 古宇田正雄

横濱市へ出張ヲ命ス 但往復共一日間ノ事

同 年同月十五日

學校長 正木 直彦

教授 六角注多良

同 津田 信夫

助教授 海野 清

講師 香取秀治郎

工藝審査委員會委員被仰付 第二部員ヲ命ス

同 年同月廿一日

教授 小林 萬吾

昭和三年度文部省視學委員ヲ命ス

同 年同月廿八日

助教授 和田 季雄

彫刻技術研究ノ爲滿二年間佛蘭西へ在留ヲ命ス

○本校講師にして宮内技師たる北村耕造氏は今回の即位大禮に關係の功績を以て十二月廿八日勳三等(初級)に叙せられ瑞寶章を授けられたり

○水谷〔鉄也〕教授は十一月三十日養母死去せられたるに付職員厚誼會より香奠を贈呈し弔慰したり

○森田助教授(武)は十二月廿八日實母を喪はれたるに付前同様厚誼會より香奠を贈り弔慰せり

○野口〔六三〕助教授は十二月中横濱市神奈川區白幡町龜久保七六六に轉居せり

○野口〔六三〕助教授は十二月中横濱市神奈川區白幡町龜久保七六六に轉居せり

六に轉居せり

○野口〔六三〕助教授は十二月中横濱市神奈川區白幡町龜久保七六六に轉居せり

六に轉居せり

生徒募集

昭和四年四月入學せしむべき各科生徒凡そ左の通り募集す 但本校規則書並志願者心得入用者は貳錢郵便切手を添へ申出づべし

日本畫科 二十人

西洋畫科 三十五人

彫刻科 十五人

木彫部 十人

建築科 七人

○本科

建築科

七人

注意 前記課目中其一を任意選擇し得べきものにありては願

書に塑造、木彫、木炭畫、毛筆畫又は鉛筆畫受験の旨を示すべし

(四) 學科試驗課目(左の科に限り中學校卒業程度にて施行す)

一、建築科

歴史(日本及西洋)。教學(代數、幾何、三角)。用器畫(幾何畫、投影畫)。

二、圖案科、金工科、鑄造科、漆工科

歴史(日本)。國語、「()」書取、解釋、作文。用器畫(幾何畫、投影畫)。

(五) 右(三)(四)の外身體檢査並口述試問を行ふ

(六) 入學試驗施行期日

三月三十日より凡そ三日間本校内に於て施行す

(七) 入學試驗日割發表期日

三月二十八、九兩日本校内掲示場に發表すべきに依り總て本校に出頭して承知すべし

(八) 入學許可者人名發表

四月六日頃本校内掲示場に發表す

(九) 宿所届出

地方より出京したる者は直ちに本校に出頭し其宿所を届出つべし

○選科入學志願者心得

(一) 入學資格

一、品行善良身體健全の男子にして高等小學校又は中學校第二

年級修了以上の者又は之と同等の學力を有する者

二、所選實技の試験を受け合格したる者

三、第一項末段の學力は本校に於て左の學課に就き試験を施行して之を定む

讀書(假名交り文)。作文及書取(簡易なる假名交り文)。

算術(加減乗除)。歴史(國史の概要)。

(二) 入學試驗課目

彫刻科塑造部 塑造(模作)

漆工科 毛筆畫及木炭畫(寫生)
實技(志望科實技初歩)

右の外身體檢査及口述又は筆答試問を行ふ

(三) 願書提出期間。出願書類及檢定料。入學試驗期日等總べて本科に同じ

○圖書師範科入學志願者心得

(一) 入學資格 品行方正身體健全の男子にして左の資格の一を具ふる者に就き試験の上選拔す

一、師範學校卒業者

二、中學校卒業者

三、專門學校入學者檢定規程に依り一般專門學校入學に關し指定せられたる者

四、專門學校入學者檢定規程に依り試験檢定に合格したる者

(二) 出願書類左の如し(檢定料免除、書式は本校規則参照)

一、入學願書

二、履歷書

三、師範學校卒業者は地方長官の承認書

四、戸籍謄本、寫眞並成績證明書提出手續等本科に同じ

(三) 出願期限、試験期日等

一、出願期限 二月十六日より三月十一日まで

二、試験日割發表 三月十五日午前本校内に掲示す

三、試験期日 三月十六日より四日間

(四) 宿所届、入學許可者發表等總て本科に同じ

(五) 選拔試験課目 (中學校卒業程度) 左の通り

實 技
寫生 (毛筆又は水彩畫)
圖案 (平面及立體)

用 器 畫 (幾何畫、投影畫)

國 語 (書取、解釋、作文)

習 字

英 語

口 述 試 問

身 體 檢 査

關 連 事 項

① 白浜徹の死去と図画師範科

前出月報記事にもあるとおり、昭和三年四月九日、教授白浜徹が死去した。白浜は明治四十年に図画師範科が創設されて以来二十二年間に互つて同科主任をつとめ、その間に三百五十名以上の卒業生を

送り出し、図画教育界に君臨した。白浜については既に本書第二卷186頁、273頁、376頁等に記したとおりであるが、なお晩年の大正八年以降は文部省視学委員に任命され、同十年九月以降は勅任官待遇となった。

白浜の担当科目は「図画教授法」週四時、「教授練習」週二時、「英語」週一時であったが、白浜の死後、図画師範科の授業科目と担当者は次のようになった。

図画師範科担当科目並びに事務

昭和三年四月調

担任学科目	毎週時間数	官職名	氏 名	備 考
繪 画	日本画	教 授	平田 栄二	(主任)
	西洋画	助 授	田辺 至	
手 工	手工教授法	同	松田 義之	同 図画師範科事務
	手工	同	高橋 吉雄	
手 工	手工教授法	助 授	水谷 鉄也	同
	手工	同	松田 義之	
教 授 法、教授練習	同	同	高橋 義之	同
	同	同	松田 義之	
用 器 画 法	同	同	高橋 義之	同
	同	同	松田 義之	
同	同	助 授	同	同
	同	講 師	同	
習 字	同	同	鈴木 信一	同
	同	同	岡田 起作	
修 身	同	同	武田 信一	同
	同	同	同	
教育學及心理学	同	同	同	同
	同	同	同	
東洋美術史	同	助 授	田辺 孝次	同
	同	講 師	矢代 幸雄	
西洋美術史	同	同	同	同
	同	同	同	
美 学	同	同	同	同
	同	同	同	